

令和 7 年 11 月 13 日(木) 射水市役所本庁舎にて射水市医師会・射水市居宅介護支援事業者連絡協議会合同の多職種連携研修会を開催しました。

今年度、射水市では在宅医療いみずネットワークと共通テーマをつくり緩和ケア・看取りについて一年を通して市民と福祉、医療の専門スタッフ共に学んでいこう！と取り組んでいます。

今回の研修では講義に看取り事例について医師、緩和ケア認定看護師より講義していただきました。

後半では、エンディングノートを配布はしているが自分達では書いたことがないといった意見もあり実際に書いてみよう！ということになりました。

今回の多職種連携研修会は医療、福祉職を主に行った研修です。

第 1 部 消化管閉塞でも『食べたい！！』という願いを支えた在宅支援

講師 真生会富山病院 副院長 本多 正治先生

緩和ケア認定看護師 長久 栄子氏

実際の症例について話をしていただきました。

A 様の病状の流れを説明され、食べることの大切さ、食べる＝栄養ではなく、食べることは生きることという大切さについて学ぶ機会になりました。

食べることは人間の基本的な欲求であること、末期がん患者の『食べること』の意味づけについても講義の中で話がありました。がん患者の『食べること』の問題についても課題があるが本人の思いを尊重するケアをチーム全員で考えていくことが求められています。



第 2 部 グループワーク『みんなの終活始めてみませんか？～思いを伝えるノートを実際に書いてみよう～』

と題して思いを伝えるノート(射水市版終活ノート)の考案者である射水市民病院の緩和ケア認定看護師

湯川 舞氏をお迎えしノートの内容について説明をしてもらいながら自分達で実際に書いてみました。

実際に書いてみた皆さんの感想は…

～感想～

- ・一度書くことの大切さを感じました。
 - ・実際にノートを書いてみるのが非常に重要な経験になったと思います。
 - ・湯川先生の分かりやすい講演を拝聴できたことで、思いを伝えるノートの活用へのハードルが下がりました。
- ノートは前向きに過ごすきっかけでもあると感じた。
- ・初めて終活ノートを書きました。貴重な機会をありがとうございました。



終活ノートは書くだけではダメです。書いたノートがどこにあるかを周囲に周知しておくことが大切です。終活を始めるのに年齢は関係ありません。出来る時にその時の思いを書く。湯川さんから「思いは変化するもの。書き直し、付箋を貼る等自由に書いて下さい。注意点はどれが最新の思いかわかるようにしておくこと。」と最後にお話がありました。

自分自身も記入できるところから少しずつ書いてみようと思います。